研究ノート

貧困研究ノートより

江口英一

私にあたえられた課題は、「書評」ということであった。そこで労働問題ないし生活問題に関する最近の書物を求めてみると、特殊専門的な書物か、一般的啓蒙的なものばかりで、この場所としては適当なものがなかなか見つからない。しかし、それは私の不勉強からの視野のせまさにもとづくものといった方が真実であろう。そこで、さしあたりいわゆる「貧困」に関連する若干の古典をよみ、そこから教示されたことを報告することでその責任を果たしたい。すなわち、そのいずれからとなく、私の弱小な吸収力を以てして、学び得た若干を、書き記すことで、かえさせていただきたいのである。

一、序述のスタイルについて

一八七〇年二月一日、マルクスがエンゲルスにあてた手紙の中に、つぎのような一節がある。この文章は、フレロフスキーという人の書いた「ロシアにおける労働者階級の状態」という書物について、マルクス自身の感想をエンゲルスに伝えた手紙の一節である。すなわち—

「……フレロフスキーの本のはじめの一五〇ページを読んだ（シベリア、北ロシア、アストラハンがそこをうずめている）。これこそ、ロシアの経済状態について真実を述べた最初の本だ。この人は、彼のいうところの『ロシア的楽天論』にたいする断固たる敵だ……。

叙述のしかたはまったく独創的だ。往々にして、もっとも多くモンテーニュを思いださせる。この男は自身で旅行し、観察したということがわかる。地主、資本家、役人にたいする燃える憎悪。社会主義的な理屈はなく、土地神秘主義はなく（共同体所有の形態を支持してはいるが）、虚無主義的極端化はない。あちこちやや親切すぎる饒舌はあるが、これがこの本の読者と想定される人々の成育段階には適当だ。とにかくこれは『労働者階級の状態』にかんする君の著書以後にでた、もっとも重要な本だ……」。

私は、残念ながらその本をよんでいない（読むことができないが）。その本は分らないが、マルクスの書いたこの文章は、私には非常に示唆的である。

周知のように、マルクスの資本論第一巻がでたのは一八六七年だ。そうすると、この手紙はそのあとのものである。そして、これも周知

のところだが、マルクスは資本論第一巻につぎのような言葉を引用している（G・オルテス「国民経済学について」より）。すなわち――

「人々の幸福のために無用な体系をうち立てる代わりに、私は、彼等の不幸の原因の研究に専念しようと思う。」

「彼等の不幸の原因の研究に専念」した、そして深くて大きな体系をうちたてたこの著者が、フレロフスキーの本について、このような表現でほめているのに、私は限りなく惹かれるのである。モンテニューの随想録のように、そしてみずから旅行し、みずから観察した記録。そこには、「社会主義的な理屈はなく」、また「虚無主義的な極端化」もないのだという。

そこで思い出されるのは、おなじように日本の庶民の生きた姿を描いた横山源之助の「日本之下層社会」である。それはいう必要もないと思うけれども、明治末期の、日本社会の下積みにあり、しかも日本の社会経済を支えている都市の諸階層、農山漁村の下層民などの生活状態を如実に描いている。そこに描かれているのは、西欧とはちがって、日本の伝統的な社会の慣習を多分にみにつけた、いわゆる「勇みはだ」をもった、職人的な雰ざわりの労働者であり、それを中心に、それを一つの典型として、記録されている。まさに「この男は、自身で旅行し、観察した」のである。

そこには、くずひろい、日稼人夫、人力車夫、芸人等をふくむスラム居住者、職人、生糸、織物等の手工業労働者、機械工場の労働者、鉄工場労働者、小作人などなど、貧民窟居住者および労働者階級の人々の暮しが、簡潔で「極端化」はなく、いいたいことが過不足なく、直截にのべられている。

そこでわたくしの貧困研究は、いったい何を序述すべきだろうか。さしあたり、それは、いろいろの階層のひとびとが、「どのように生きているか」、さらに「今日をどのように生きているか」を書きとめておくことだと直観せられる。

ではなぜ「生きている」ことを書くことなのか。それは二つの理由によっている。一つは、全たくみもふたもないことだが、あえていってしまえば、人間は「死ねない」からであろう。

「生きる」ということは、すでに与えられた事実なのである。そしてそれを何とか続けようとする。なぜ人間は、どのような屈辱を忍んでも、片わになってでも、何を食べても、生きていこうとするのか。いずれにしても、だとすると、「生きる」という事実自体が、「生き」続けること自身が、ある意味で、すばらしいことであらねばならぬはずである、という理くつになるだろう。そうすると、わたくしの貧困論は、「生きる」ということが、素晴らしいことでなければならぬという結論を、書くことでなければならぬだろう。第二の理由は、それを書きとめておくことの意味である。それは、その記録から、「今日を生きる」人びとが、それなりにさまざまな示唆を受けるだろうからである。大切なものは、「生き」つづけた結果、何か素晴らしいものをつくりあげたとか、残したとか、その残されつくりあげられたものではない。大切なことは、いかに「生き」、そして「消滅」していったか、そのこと自身の経過と行動である。それらは消える。しかしそれは書きとめられることができる。また書きとめられねばならない。

記録は何かを訴え、そこから人々はそれぞれ、何かを訴えられるであろう。その一つの物的手段となるであろう。

ところでこれも古典の一つだが、「賃労働と資本」の一節に次のような文章がある。それはごくありふれたものである。すなわち、――「したがって労働力は、その所有者である賃労働者が資本家に売る一つの商品である。なぜ彼はそれを売るのか？　生きるためである。」人間は「死ねない」から、「生きるために」、その他に何の手だてのない人間たる労働者は、自分の労働力を商品として販売する。もともと労働力は商品ではないけれども、この社会では、商品として売らなければ「生き」ていけないのだ。

労働力を売った労働者は、その使用者の工場や商店で、すでに与えられた機械・設備のもとで働らく。この機械や設備はそれを動かす労働者の意志とは全く無関係に、別の人である使用者の意志で、変えられたり、入れられたり、やめられたりするものである。それと同じように私達は、まるで知らなかったところに工場や商店ができ、アパートがつくられ、人々の生活がいとなまれていることを見る。「生きる」ということは別してその人の営みであり、自分に関係したことだけれど、一方ではまことに人間一般に共通のことでもある。にもかかわらず、私のまったく知らない、そしてそこで働く人々にとっても、全く無縁の生活が生まれ、発展し、亡びていく。「生きる」ということは自分にとってはまことに確実なことだが、他人には何の関係もないことであり、全体的には、何とはかなく、そして別して私の知らない、見ず知らずの世界によって埋ずまっていることであろう。

二、人間と物質について

エンゲルスの有名な著書に「イギリスにおける労働者階級の状態」という書物がある。この書物は貧困研究、そして社会調査の古典でもあると思う。この書物の教えるところはきわめて多角的であるが、その中につぎの一節がある。すなわち――

「イギリスの労働者にたいして一層ひどく堕落的に作用しているものは、社会におけるその地位の不安定なこと、賃金でその日ぐらしをしなければならないこと、つまり簡単にいえば彼ら労働者をプロレタリアたらしめているところのことがらである」。

この文章からわかるように、エンゲルスはその頃の労働者の貧困な状態と、堕落的側面を描こうとしていることがわかる。これらの現象は、本書の理論的基礎となっている「競争」によって解かれていく。本書は、まず第一章「大都市」として労働者およびさまざまの同類の社会層を把握し、ついで章をあらため「競争」として、私有財産にもとづく競争が貧困と堕落の根元であることを指摘している。経済学説史的・理論的には、その点まだ未発達な点があるのかもしれない。周知のように、これはエンゲルスがまだ二四才の若さで書いたものなのである。けれども私はここでの理論的土台としての「競争」の位置を、そのように受けとらない。「競争」の概念は、ここでは現実把握のためのかなり具体的な範疇として、いわば作業的概念として用いられていると思う。そしてなお「競争」は、もちろん競争一般でなく、資本制社会でのそれであり、また労働者同志のそこでの「競争」には、資

本制生産のワク組みが鉄の強固さで存在することが予定されている。したがって後者こそが正に根元であるが、現実分析のためにはあらかじめそれは与件として、より現実に近い理論的道具としての「競争」をもち来り、それを以って現実を把握していくことは正しい順序であろう。

ともあれ、資本制生産とその社会のもとでの、無産者としての労働者同志の「競争」は、必然的に劣悪な労働および生活条件を、更におし下げる強力な力として働いている。「競争」はここでは、ぬけ道のない泥沼的様相を将来し、日々の彼等の生活は、まことに気も狂うばかり不安で、悲惨なものたらざるを得ない必然性をもっている。

このような世界で、いったい「生きる」とはいかなることなのだろうか。

死ねないから生きているのだとしても、人間は、このような環境においてすら、少しでもよいものを着、食べ、住むために、人を蹴おとし、きずつけ、殺し、欺むき、こびへつらい、いつもおどおどし、勇気を持たず、己れの穴にのみ逃げこむ。そして少しの利益に買収され、友を捨て、人間を放棄し、堕落していくのだろうか。

これは、人間が物質に対し、根本的に弱く、従属した存在であることを示している。人間の弱さを私は決して忘れてはならない。

だとすると、このような人々の「生きる」世界に分け入るべき貧困研究――生活研究は、まずもってそのような、いわば箸にも棒にもかからない、全く唾棄すべき、我利我欲の「欲呆け」的世界をこそ予定すべきである。変貌し、裏切り、信用のかけらもない人間の形成する社会を前提すべきである。

しかし、このような議論を極限におしすすめることは、まさにマルクスの排撃する「虚無主義的極端化」となるおそれがある。

ここで思い出すのは、エンゲルスがその「状態」の著述に先だち、「ロンドン便り」としてドイツの一雑誌に書きおくった通信文の一節である。この文章は一八四三年にかかれている。すなわち――

「……こういう次第で、この国では（イギリスのこと―筆者）すべてが生活であり、関係であり、不動の大地であり、行動であり、いっさいは外面的形態をとる。これに反してわれわれは（ドイツでは―筆者）シュタインの気のぬけたみじめな書物をうのみにすると、大したことを知った気になり、あるいはあちらこちらでバラ油の香のうせた意見を開陳すると、自分がひとかどの者であるように信じたりするのである」。

何と痛烈な文章であろうか。そして注目すべきは、イギリス人の健全な経験主義が光をあてられていることである。観念は、ドイツ風に観念で残ることなく、イギリスでは「必ず外面的形態をとる」。そして人々はこの「外面的形態」によって判断していく。このような事情については同じ「ロンドン便り」において、またつぎのような文章にぶつかる。すなわち――

『……われわれが事実をとおして知りえないことは、われわれにはなんのかかわりもない。われわれは、神と宗教のようなこういった空想的作品は問題となり得ないような（ほんとうの事実）の地盤の上に身をおく』（マンチェスターのウォッツの言葉をエンゲルスが引用し

ている)。こうして彼らは、それ以外の彼らの共産主義的主張を事実の証明にもとづかせるが、事実の受け入れにあたっては彼らはほんとうに用心ぶかい。この人たちの執拗さは筆紙のつくしうるところでなく、彼らが聖教者を説伏しようとするやり方は、天のみぞ知るだ」。

ここにはイギリス風の経験主義が描かれている。われわれは人間の世界の現象を頭の中で、観念的に創造し、構成することはいましめなければならない。

ともあれ、一方からいって、私が人間の物質に対する弱さとして述べたことは、それは一つは人間のいわば健全さを表現していることでもある。それは「堕落」などではないかもしれない。前に書いた人間の行動にまつわるさまざまないやらしさは、人間は弱いものであることを自覚した人間の、かしこさの表現でもある。

人間または精神は、物質に対して弱い。それ以上ではないが、またそれ以下でも決してない。

そこで貧困研究は何をなすべきか。「今日を生きる」人間が、その健全な考えかたに立って、ほんのちょっと「明日」を考えるための一つの糧となるものを書いておくことなのかもしれない。その日々の苦難にみちた、狂気の困窮生活に耐え、たとえば一日に一刻の間でも自分の位置を反省することがある、このような人々が出来るだけ多く生まれるための資料を作成すること、これが一つの目的であろう。貧困研究は、決して、長期間に亘り貧しさにたえ、闘っていく強靱な精神の持主をその「人間像」として予定していない。

三、貧困と人間

さて、ふたたび、今度はエンゲルスからマルクスにあてた一八四四年一一月一九日付の手紙をかかげよう。その中に、つぎのような一節がある。すなわち——

「フォイエルバッハは神から『人間』に来ています。かくして『人間』は確かにまだ抽象的後光を戴かされています。『人間』に通ずる真の途は逆です。われわれは自我から、経験的な肉体をもった個人から出発し、シュティルナーのように立止まらずに、其処から『人間』に高まらねばならぬのです」。

もし『人間』、貧困研究の場にすえられた人間が、すでに書いたような位置にあり、生き、消滅していく存在だとすると、エンゲルスのいう「高まる」とはどういうことなのか。そもそもそれは可能なのだろうか。貧困研究は「生きる」ことを描くことだとして、このような局面をも視野におかねばならなくなるのだろうか。

「高まる」とは「経験的な肉体」から「出発」し、そこで「立ちどまらずに」、いることであると教えているが、だからといって経験的な肉体を離れてしまうことではあり得ない。少なくとも、それは、これまでの文脈からしても、全たく不可能なことである。それは明らかなことである。否、むしろ「経験的な肉体」のますます重大であることを自覚していく行程こそ必要である。前提としての物質的基礎くして、「高まる」こともあり得ないことを、ますます明確に把握することこそが、まさに「高まる」ための不可欠の要件である。

しかし、エンゲルスの同じく「状態」の中の一節につぎのような文句がある。すなわち――

「困窮は祈ることをおしえるが、それ以上に重要なことは、ものを考え、行動することを教える」。

そうだとすると、われわれは貧困の生活の中で、何を「考え」るべきであろうか。貧困研究の中で、何を「考え」るべきであろうか。

少なくとも、ここでも、「経験的な肉体」の基礎たる物質的状況を把握し、そのなりたちを深く解明することこそ基本的な一つの方向である。

しかも、その研究を「立ち止ま」らせないことなのであろう。その道がどこへいくのかは、ともあれあとのことにして、いつも歩みつづけていることが大切なのであろう。

そして、その道がどこへ通ずるにせよ、つぎの方向は一つである。すでにふれたように、人間の出発点をなす「経験的肉体」について、次のような視角が可能である。すなわち、たしかに人間は物質なくして生きられない。ところで、ある種の野生動物は、これをとらえて飼おうとしても、人の与える餌につこうとしない。そして死んでしまう。ところが人間は、弾力性をもっている。新しい環境と条件に適合していく。更に適応するのみならず、環境と条件をつくることにより、自分をかえていくといわれる。それは、物質的条件への適応に限度があるから、そこから逆に条件と環境をかえ、世界を変え、人間を変えていくのであろう。

ともあれ、エンゲルスがおなじく『状態』の中で、イギリスの労働者の窮状を目して、「そして人間というものは、しばらくのあいだは、どんなわずかなものできりぬけていけることだろう」といったことは示唆的である。しかし、それはやはり「しばらくの間」なのである。

すでに書き記したように、エンゲルスは「貧困」は「考える」ことを教えるが、さらに「行動する」ことを教えるといった。下って二〇世紀のイギリス社会保障の父といわれるW・ベヴァリッジは、「貧困は憎悪を生む」といった。ともあれ、「貧困」はいかなる「行動」をすることを教えるのか。

すでにあげたように、エンゲルスは「ロンドンだより」で、イギリスの精神的状況について、「この国ではすべてが生活であり、関係であり、不動の大地であり……」云々とのべた。そのおなじ「ロンドンだより」（一九四三年六七日付）の中で、また、イギリスの労働者の状態についてつぎのごとく報告している。すなわち、(イ)彼らは事実に基礎をおいてすべてを考える。(ロ)自主性に富んでいる。「いったいにイギリス人というのはだれでも自分の新聞を購読し、自分の指導者の罰金負担を援助し、自分の礼拝堂とか会館に金を払い込み、自分の集会にでかける。(ハ)最下層の労働者でも「トマス・ペインやシェリーの著作をよみ」、講演会に出かける。(ニ)善良であるが「気質の弱さとはまるで無縁である」。等々。

これらの、いわば明るい言葉は、エンゲルスの『状態』におけるあのように暗い、そして精神的荒廃を一面でともなうみじめな状況についての、刻明な把握とどうかみあうのか。

その一つの示唆は、『状態』におけるつぎのような文章からくみと

れる方向である。

すなわち、『状態』の後半に、「鉱山プロレタリアート」なる章があり、そこに炭鉱労働者の闘争がえがかれている。彼等は驚嘆すべく堅忍不抜である。

「……ことに一そう特筆すべきは、炭坑主とその忠僕どもがやったあらゆる敵対行為にもかかわらず、彼らが平静をたもち、平和的だったことである。ただ一つの復讐行為もなされず、ただ一人のうらぎり者も虐待されず、ただ一つのぬすみもされなかった。……」

また「……それはおぼえずこのうえない驚嘆の念を禁じずにはおかない堅忍と勇気とえい智と熟慮とをもって、被抑圧者がおこなった闘争であった。……しかもこの人びとはすでにわれわれがみたように、まだ一八四〇年には、まったく粗野な、不道徳な人間として、児童雇傭委員会の報告書のうちにえがかれている人たちなのである」と。

そしてさらに重要なのはつぎの一節である。

「それは、目にみえる、なま身の敵にたいするたたかいではなくて、飢餓と窮乏、悲惨と家なき生活とにたいするたたかい、富者の残酷によって狂気にまでそそりたてられる自分自身の激情にたいするたたかいであった」と。

すなわち、子供をかかえ、明日の食と住とに困る労働者が、しかもなお闘いに立ちあがるという勇気を、悲惨な日常生活の中での堅忍持久を、とりあげて描いているのである。これこそ真の勇気であり、「人間」である。そこには英雄主義の一とかけらもない。しかも報告によれば、この闘争も五ケ月にして完全に敗退せざるを得なかったのである。

しかしその目にみえない影響力は巨大であった。「……なによりもまず、この一九週間にわたるストライキは、北部イングランドの炭坑夫たちを、これまで彼らがしずみこんでいた精神的な死から永久にすくいだした。彼らは惰眠をむさぼることをやめ、自分自身の利害にめざめ、文明のうごきに、ことに労働運動に参加してきた。……彼らの総数のすくなくとも四分の三をチャーチストにした」と。

すでにあげたベヴァリッジのすすみかたは、「貧困」―「人間」―「社会保障」であるのに対し、ここでの道すじは、「貧困」―「人間」―「階級闘争」ということになるのであろうか。

四、貧困研究から貧困層研究へ

はじめに私は貧困研究は、人びとが「どのように生きているか」。あるいは「今日をいかに生きているか」を描写することからはじまるのだろう、ということをのべた。

その生きかたを消費生活に限っても、まさに、さまざまである。もちろん「標準」的なものはないといってよい。もしその労働形態を自立的営業者にとってこれをみれば、「標準」的なものがあるかもしれない。「標準」的な家族に応ずる「標準」的な消費生活、そして消費水準が考えられるかもしれないのである。

しかし私の貧困研究に予定される社会は、現在の資本制社会である。ここでの圧倒的部分たる被用者、賃金労働者にとっては、消費生活における「最低限」が重要であって、「標準」的生活なるものは、もし

あったとしても労働者層にとっては意味を失なっている。なぜなら、消費生活や水準は、個々の労働者にとっては、与えられるものであり、またそれを達成するかどうかは、まずもって彼がやとわれてはじめて問題になるものだからである。しかもこの経済制度下では、職業につけない失業者を絶えず創り出していく。と同時にその所得――賃金は絶えず下降の圧力をうけている。かくて労働者にとっては、生活の「標準」よりも「最低限」の確保こそが重要となってくる。

貧困研究における「生きる」姿の把握は、必然的に、「最低限生活」の把握へと導びかれざるを得ない。

「最低限生活」の把握をいかにするか、その科学的技術的方法については長い歴史とさまざまな種類がある。しかしこの方法論の検討は当面の問題ではない。

同時にここでは、問題は、そのような「最低限」における物質的生活の基礎と『人間』とのかかわりにある。日常生活と『人間』との関係がキイポイントとなる。

ということは、『人間』として生きる基本的すがたと、その基礎となる物質的条件を、一本のつながった糸として、後者を前者への展望において発展的にとらえることである。それはきわめて日常的な生活要求であるところのものを『人間』としての要求として正しく位置づけることである。その正しい位置づけができたとすれば、日常的要求は、必然的に社会的要求として発展していくであろう。たとえば、この正しく位置づけられた日本の現実の中でのその物質的条件とは、少なくとも飛躍的に高いレベルの水準を必要としていることを明らかにすること、これである。

こうして、われわれは、このような物質的客観的条件を、主体的にとらえることができる。

そこで貧困研究が進むべき方向は、つぎの道である。すなわち「貧困の測定から貧困層研究へ」、そして更に、「貧困そのものの研究へ」という道程である。この方法は、私達の貧困研究がそのはじめからとってきた一貫した方法なのである。

それは貧困研究が、究極的には、貧困の消滅のためにこそなさるべきであるという自明の理にもとづいている。しかしこれらのくわしい展開は、つぎの機会にゆずりたいのである。